



照明探偵団通信

vol. 118 Shomei Tanteidan Tsu-shin

東京調査 下北沢

2022.10.27 渡邊元樹 + 劉伝熠 + 伊藤佑樹

今回の東京調査は、若者に人気の下北沢。東京で最も文化的な街の一つとして、古着店、飲食店、劇場、ニッチな映画館やアートギャラリーなどが連立する街である。照明探偵団が2009年に行った下北沢の調査から、小田急線埋設により、街がどのように変化したか、また2022年5月28日に開業した「下北線路街」を調査し、新エリアの照明計画を吟味すると同時に、古くからの商店街とも比較してその差異を探究した。

■下北線路街開発

今回調査した下北線路街は、小田急線の地下化により生まれたスペースに新しく開発されたエリア。今まで線路で分断されていた南北エリアを繋げたいという思いも込められており、随所に回遊性の生まれるような開発が行われている。緑地化された広場エリア、テントやフードトラックなどで構成された仮設エリア、また新しく建てられた商業施設が連なるエリアといった多種多様な計画が行われている。特色が異なるエリアごとにどのような計画が行われているかに着目し調査を進めた。



空き地をReloadから撮影

■空き地

東口を出て東北沢方面へ向かうとまず『空き地』と呼ばれる開発エリア。このエリアはテント/コンテナ/フードトラックといった要素で構成され、仮設の空間となっている。空間全体はカテナリー照明と店舗からの漏れ光のみといったシンプルな光環境。色温度は2400Kの光を使っており心地良い明るさ感を作り出している。敢えて簡素な造りにしているのかもしれないが、開発エリアと呼ぶには簡易すぎる印象を受けた。しかし簡素な空間であるが故に今後様々な空間への展開が行われる可能性もあるように感じた。

空き地エリアは従来の下北沢の街中にぼつりと佇むように存在している。全体的に落ち着いた雰囲気を持つ古い町並みと、新しく計画され初々しさを放つ再開発エリアの景観が隣り合う景色はとても複雑であり、かつ今後の新しい下北沢の風景でもあるように感じた。

■Reload

空地エリアを更に北西へ進むと、次は店舗が立ち並び商業施設『Reload』に続く。Reload内にはポップアップストア、お香専門店、立ち飲み屋、古着屋や理髪店など、下北らしい形態の店舗が入っている。施設の要所には吹き抜け空間が設けてあり、それぞれ1、2階の店舗前スペースにはテラス席が設けられ屋外での回遊性が自然と生まれるような計画がされている。Reloadの照明は主に空地エリアと同じくカテ



下北沢駅周辺地図

小田急線の地下化に伴い、東北沢駅～世田谷代田駅の間に新しい街【下北線路街】が開発され、まちを支援するという思いから、地域住民の声を聞きながら再開発を順次進め、2022年5月28日に全面開業した。線路沿いには、保育園、温泉旅館、商業施設、学生寮、イベントスペースなどが新設された。



開発が進む下北沢駅前広場



カテナリー照明を用いた再開発エリア『空き地』



商行施設Reloadに面する通り

ナリー照明と店舗からの漏れ光で構成されている。カテナリー照明でほんのりと照らされた床面照度は20lxとなっており、程よい明るさ感を演出している。Reloadの印象は、周りに影響を与えず単一で完結している空間であるが、一方で閉ざされた印象にも受け取れる。多くの年代の方に興味をもってもらえる店舗が多くあるが、Reload内への誘導性が少し足りない気もした。外への余分な光を出さないことは素晴らしいが、もう少し中へ誘導するような照明計画が施されていると、よりReloadエリアでの回遊性が生まれるように感じた。

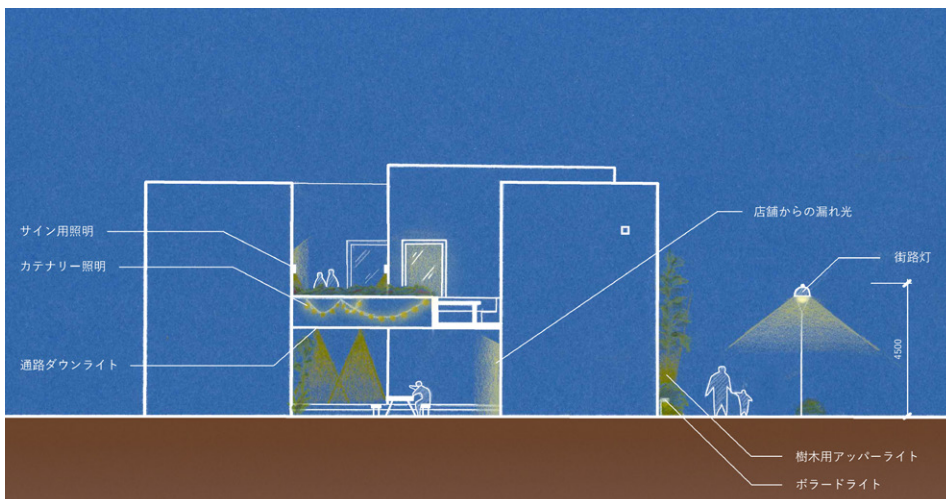
■ NANSEI PLUS・シモキタエキウエ

駅自体やその周りのエリアも開発されており、駅舎2階には雑貨屋や飲食店が立ち並びシモキタエキウエ、南西口をでるとシアター・カフェ・ギャラリーなどが併設されたNANSEI PLUSが広がる。シモキタウエは駅舎内の空間であるため隣接するNANSEIPLUSと比較すると、明るい(色温度3000K、照度300lx)空間となっている。一方でNANSEI PLUSエリアは色温度2700Kの光が使われており、全体的に落ち着いた光環境となっている。各所に設置されたスタンドライトのデザインにも細かな配慮が見受けられ、光源を筒状のフードで覆い床面だけに光を落とす形状となっており、歩行者の目に直接光が届かないようデザインされていた。隣り合う両エリアで少し光環境にギャップを感じたが、駅舎という明るさを確保する必要がある空間と商業施設と併せた照明計画を行うのは難しいところである。(伊藤佑樹)

■ ののはら

NANSEIPLUSを出て、緑地帯の遊歩道を歩いていくと、家族や学生らが多く集まる『ののはら』に入る。ここは他の下北沢のショッピングエリアに比べ全体の色温度が低く、商業施設も少ないので、より温かみを感じさせ、心地よい空間になっている。『ののはら』にはバスを仮設書店にしているものがあり、その裏には下北沢園芸部もあり、屋間子ども達が多く集まってくる。広場内の植物はきちんと計画された照明で照らされており、夜間は書店の光が目に入るが、色温度を統一している為通りの静かな雰囲気によく合い、好印象だった。

個人的な印象としては最初は今回行われた再開発は従来の下北沢の街並みと乖離しているように感じた。しかし調査を終え考察していく上で、今後空地/Reloadエリアを皮切りに従来の下北沢の街並みと再開発後の街並みとが馴染んでいき、新たな下北沢の景観を作り上げていくのではないかと感じた。(劉煒燿)



Reload 断面スケッチ



ののはら広場に設置されたバスの書店



駅構内/飲食店



下北沢南口商店街



商業エリアと駅舎での色温度の違いが分かる



駅東側にある本多劇場エリア。古くからの商店が並び



茶沢通り沿いの古書店ビビビ

■ 変わる街

調査する中で老若男女様々な層の人が下北沢に訪れていた事、また新しく開発された下北線沿街を中心に人の回遊性があることを感じた。2013年に駅の北と南を遮断していた地上線路は地下に移され、街にはこれまでになかった人の導線が生まれた。今回新しくオープンした『空き地』や『Reload』などの商業施設ではポップアップストアなど多く出店し、簡素化された空間に自由度や仮設性を持たせる事で決まったエリアに人が長期集中して滞留することを避けて

いるように感じた。これに沿うように照明計画は色温度、光源の位置など基本的なルールを定め且つ照明器具が極力目立たないようにし、人の導線を作るのに一役かっていた。人を集め留まらせる事ではなく動かすことで街を活性化しようとする試みは、下北沢の街が持つ色合いや特色を単一企業や自治体による開発で上書きするのではなく下北沢で生活する人訪れる人に今後の街づくりの方向性を託されているようで、地元民の街への愛着や思いを大切にしているように感じた。(渡邊元樹)

第70回街歩き：下北沢&神戸

文化発信地の光環境

2022.11.25 & 26

小口尚子+坂口真一+發田龍治+古川智也+大久保杏美+本間睦郎

2019年以来3年ぶりにみんなで1か所に集まっての街歩きを開催。

『文化発信地の光環境』をテーマに関東では面白い開発が続々と完成している下北沢、関西ではおしゃれな神戸を歩きました。

本格的な冬が始まる前に、およそ3年ぶりの大人数での街歩きを行いました。テーマは『文化発信地の光環境』。関東では下北沢、関西では神戸と、2か所での開催となりました。

下北沢での街歩きは参加者が4班に分かれ、2班は小田急線世田谷代田駅から、残りの2班は東北沢駅から、それぞれ下北沢駅を目指し歩きました。

また神戸では六甲山頂からの夜景を見てからの街歩きスタートとなりました。

■下北沢ー1班

1班は世田谷代田駅から下北沢駅までのコースを歩きました。まず代田駅から温泉旅館由縁別邸までの道は、シンプルで主張のないスタンドと樹木へのアップライトで構成されており、情緒や落ち着きを感じさせる光環境となっていました。また、ポールの眩しさは多少あったものの低い色温度で統一されていることでそこまで気にならず、安全面を考慮すると適当な照度と感じ、総合的に英雄となりました。

低層商業複合施設 BONUS TRACK (ここまで2班と合同) を超えて、昔からある下北沢一番街へ。昔ながらの街路灯は色温度が高く、店舗の灯りと調和していないというところで犯罪者。また2つの対照的なコンビニがあり、ひとつはメンテナンスがされておらずランプが切れているコンビニ、もうひとつは看板だけでなく店内の什器照明も一部消灯している節電の意図が感じられるコンビニ。前者は犯罪者、後者は英雄となりました。

下北沢一番街の街路灯に対して、下北沢東会のスタンドグラスの街路灯は下レトロで街に合っているということで英雄との意見が多くありました。

最後に訪れた2022年7月開業の高架下の商業施設ミカン下北は電球のイルミネーションや大階段のライン照明、店内のネオンサイン等、見せる演出照明を多用し「映え」を意識した光環境となっていました。

小田急電鉄が掲げている「支援型開発」というテーマにふさわしく、昔ながらの良いところは残しながら、地域の人々と訪れる人々がこれからつくっていく街というのが随所に感じられる街歩きでした。(小口尚子)

■下北沢ー2班

2班も1班同様、世田谷代田駅からスタートし、下北沢駅までのコース。世田谷代田駅前は電球色の落ち着いた雰囲気温泉旅館のある通りを歩きました。温泉旅館の行灯風の特注低位置照明と拡散配光のポール照明が併用されていますが、低位置照明だけの方が情緒的で美しいようにも思います。駅前の防犯という事も考慮するとポール照明で床面15lxの照度を確保させるを得ないのでしょうか。

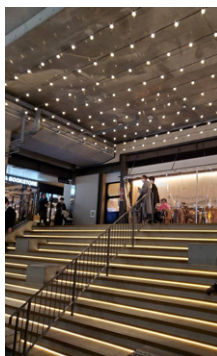
しばらく歩くと BONUS TRACK という



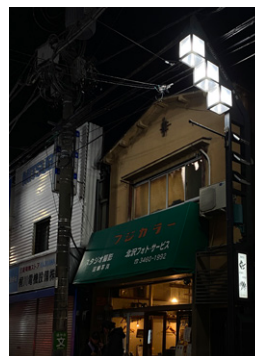
賑やかな下北沢で3年ぶりの大人数での街歩き



メンテされていないコンビニ VS 節電されているコンビニ



ミカン下北の大階段



一番街の色温度が高い街路灯



東会のレトロな街路灯



温泉旅館のある通り シンプルなスタンドと樹木へのアップライトで構成されている



BONUS TRACK のカテナリー照明

2020年に開業した新しい商店街があります。ここでは電球をぶら下げたカテナリー照明や蝋燭の光など夜のあかりを楽しむ工夫がされており団員からは「英雄」との意見。一方この看板は、眩しすぎるという評価で「犯罪者」に。

下北沢駅前の商店街は、光がゴチャゴチャになっているが、それが下北沢らしさとも考えられ、そこに魅力も感じられます。英雄が犯罪者かと物議を醸したのはスタンドグラスの街路灯。「個性がある」「二連になっていて美しさが消されている」「こんなの今は作らない」など様々な意見がありました。

京王下北沢駅側商業施設にも電球を直接見せ



懐かしさを感じさせるスタンドグラスの街路灯 英雄が犯罪者か議論に

る照明が多くあり、今回のコース全体にこの手法が多く見られました。光源はLEDになっていましたが懐かしさを感じさせます。昭和、平成、令和という時代を肯定し楽しもうという雰囲気、この街の光から感じ取ることができました。
(發田隆治)

■下北沢ー3班

3班は、小田急線・東北沢駅の西側から下北沢駅周りを調査。両駅の間エリアにできた低層分棟式の商業施設「reload」は、オープンエアの白い建物に多くの植栽が施され、地明かりや演出照明の温かい光に包まれていました。

珍しい黄緑色LEDで細かな葉が発光しているように見えるクリスマスツリーイルミネーションや青色サインと室内から漏れ出る明かりがムーディという理髪店のほか、通路に面した窓から白く強烈な光を発して雰囲気を壊している古着店、建物壁面に異様な影を作っている樹木のライトアップ、植栽の中に放置されたストリングライト等を発見しました。

シャッターギャラリーや天狗まつりで知られる下北沢一番街商店街は、老舗商店も多く、郷愁を覚えます。しかし、商店街の突き当りの頭上近くに設置されたデジタルサイネージの光は、大量・高輝度で唯一目立ち、夜の景観を損なっていたのが非常に残念でした。

京王線・下北沢駅の高架下にできた商業施設「ミカン下北」では、あずま通りと交わる高架橋下を照らし上げて、暗がりのない開放的な空間が生まれており、全員一致で英雄。

駅へ続く高架横は、通常、素通りする空間が多いですが、街区を通る「アクセス道路」として整備し、ライン照明が施されて、アウトレットパークのように整っていて高揚します。

飲食店が並ぶ通路は、架線の碍子やケーブルを使った電鉄会社にとって象徴的な空間がデザインされ、リズムカルで程よい光が床に落ちています。有名ベーカリーや大衆ビストロ、タイ、台湾、韓国、ベトナムといった多国籍の魅力で明るい店内へ目が向いて、楽しい宴へ誘われました。次回はゆっくり下北沢を訪ねたいと思います。
(古川智也)

■下北沢ー4班

4班は東北沢駅から下北沢駅まで主に鉄道の地下化や高架化によって大きく街の雰囲気が変わったところと昔ながらの雰囲気を残すところを歩きました。

線路跡地に新しく開発されたエリアは、全体的に色温度が低く照度も高すぎなかった一方、開発エリア外では商業施設が立ち並び明るい場所もあり、落ち着いた明るさのエリアと賑やかで明るいエリアとが混在していました。しかしどのエリアもコンセプトをもって照明計画されていると感じました。今回は英雄が多かったように思いますが、そんな中でも樹木のライトアップは建物に影ができ、やっぱり難しいと感じる場所もありました。

線路沿線から少し離れたエリアは昔の良き昭和の雰囲気が色濃く残る場所が多く、ザ・スズナリのレトロ感やその周囲にあったステンドグラスを使った街灯など、どこか懐かしい雰囲気を感じるすることができました。



ライトアップされて開放的な空間になった高架下



高架横のファサードが統一されたアクセス道路



人気飲食店へ誘う光が仕込まれたミカン下北



昭和の雰囲気を残すレトロな街路灯



線路があった場所：樹木のライトアップは難しい



劇場の街下北沢を象徴するザ・スズナリと鈴なり横丁

下北沢駅周辺はもともと線路があった場所をどのように活用していくのかという意味では、渋谷の東横線跡地同様、活用例の一つとして線路があった時代との比較などできるとよかったです。そういう意味でも、以前街歩きした箇所を振り返り、大きく様子が変わったと思われる場所を、以前の資料も振り返りながら街歩きしてみるとまた新たな発見ができるのではないかと思います。
(坂口真一)



線路跡地を活用して賑わいを生み出している



3年ぶりの大人数での街歩き後、久しぶりに参加者全員と楽しくお酒を飲みながら語りました

■神戸

神戸の夜景は日本3大夜景の一つとされています。今回の街歩きは、最初に、この神戸の夜景を遠景で眺めるところから始めました。六甲山頂からの、まるで点描画のような眺めはもちろん英雄だったのですが、なかでも港湾施設に散りばめられたオレンジ色の光が特に印象的でした。オレンジ色の光の正体はナトリウムランプ系の高輝度放電灯だと思うのですが、近くで見ると、犯罪者になりがちな毒々しい強烈な光も、海と陸の境界線を示す点描画の構成要素となると、素敵に個性を發揮してくれることを発見しました。一方で、カラフルな原色RGBの光は遠目にも違和感を覚えました。

その後、私たちは「点描画を構成する光を拡大して見てみよう!」との主旨で六甲山頂から神戸市内へ移動しました。

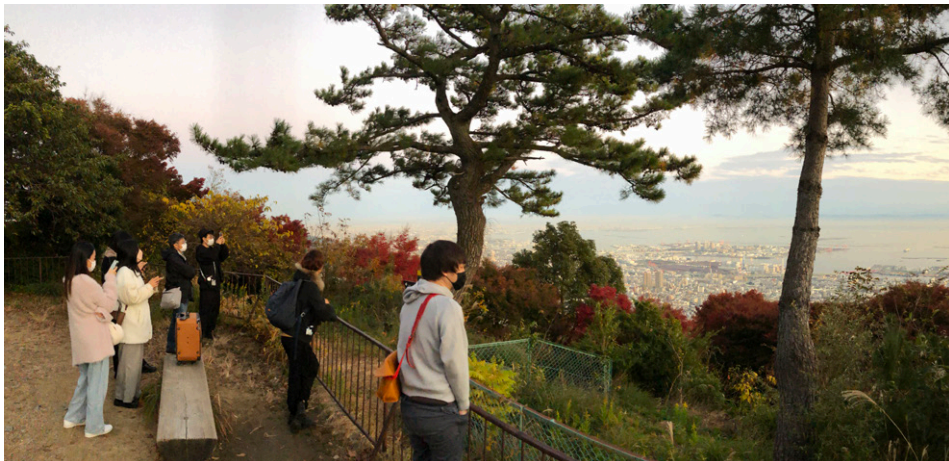
遠景では、大阪・神戸の特徴的な点描画のような光の密集度合いや散らばり方に英雄を感じたのですが、近景では、神戸のオシャレな雰囲気とそれを活かす照明計画が実に素敵で、こちらでも至るところに英雄が出現していました。さりげなくルイスポールセンの器具が街灯に使われていたりするのも素敵でした。本来、形のある器具はその個性が街並と不一致となることもあると思うのですが、神戸では最適なマリアージュ状態でした。

しかし、古くからの文化を震災にもめげず復興して維持している、そんなオシャレな神戸の街にも新参者的な犯罪者も目につきます。

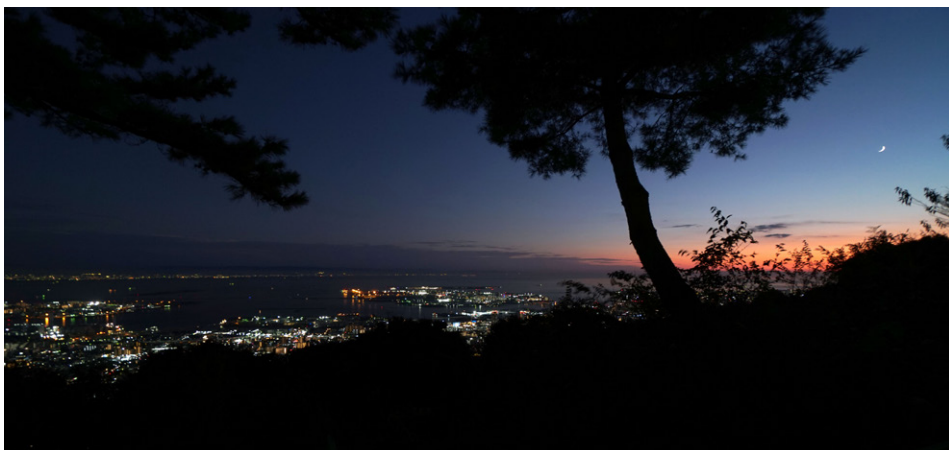
なんととっても最凶の犯罪者は、やはり原色RGBの光です。この情緒をぶち壊してしまう暴力的な存在は、山頂から眺めたときには違和感に留まっていたのですが、現地の近景では、凶悪犯罪者としての姿を開き直的に露わにしてみました。

例えば、中華街の入口を象徴する門に対して、その本来の色を無視した毒々しい原色RGBの照射光は意味不明です。本来の門の姿にまったく合っていません。まるでピノワールの豊富なワインに七味唐辛子を振りかけて飲むような違和感があります。私は、辛い物が比較的好きで、特に京都の黒七味はうどんに振りかけると香ばしさが加わり、出汁も引き立つと思うのですが、まさか、これまた大好きなワインに振りかけて飲もうなど考えたこともありません。多くの人々も同様だと思います。なぜならば、どちらも個性が強く、しかも、存在している世界が違い過ぎるからです。RGB照明も同様で、それが似合う街並みもあるのかもしれませんが、本来の姿や色が印象的なものへの無造作な原色の照射は、お互いが否定し合うが如く良いところは決して見えてこないものだと思います。

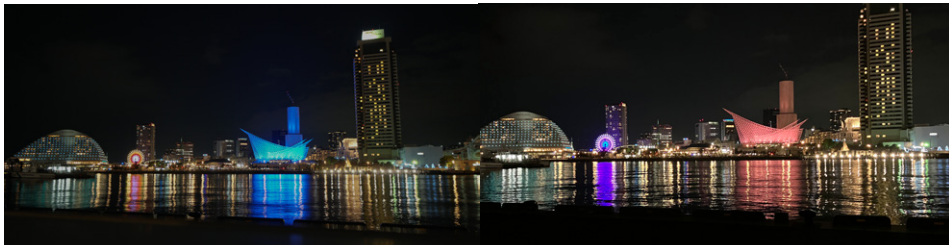
さらに、メリケンパークでもRGB原色照明の罪悪を目の当たりにしてしまいました。メリケンパークにある海洋博物館は、まるでカラトラバ作品のような構造美です。本来、これをライトアップするのであれば、この造形を活かすように照射するのが照明デザインの基本のはずです。これをLEDの技術面を誇るが如くのRGBでのカラーチェンジ照射をしてしまうと、本来の構造美が希薄になってしまいがちです。せっかくの豊潤な構造美に対しての、別世界のような脈絡のないRGBのカラーチェンジ照射は、違



各々のスタイルで、夜景を鑑賞。徐々に暗くなっていく情景がロマンチック



「夜間景観は自然との調和で、さらにその価値が高まる」そんなことも実感



「映え」るのだろうけど、インスタに2度アップする人なんて、居ないし・・・

和感でしかありません。さらに、こういった色使いは個性だけは強いので、同じように照射をされている地域の印象を平準化させてしまいます。つまり、どこもかしこも同じように見えてしまうということです。もっとも、確かにどこもかしこもインスタ映えることにはなるのですが・・・

無意味に思えるカラー照射は、前回の関西地区街歩きにおける大阪中之島でも目立ってしまった犯罪者なのですが、これらは「光害」ならぬ「色害」といえるのではないのでしょうか。街あかりは「映え」だけを狙うのではなく、照射されるものに対するリスペクトを忘れることなく、いかに活かすかが大切だと思うのです。

現代の、至るところで一触即発的な緊張が高まっている地球においても、きっと、皆が相手へのリスペクトさえ忘れなければ、仮に多少の諍いは生じたとしても、決して戦争に至ることはなく平和が維持できるはず。リスペクトの精神こそが平和に繋がるのだ!・・・照明分野から発信していきたいものです。

(大久保杏美、本間睦朗)



せっかくのきれいな赤い門なのに・・・



シンプルなデザインの器具がびったり

第67回サロン@ ZOOM

下北沢&神戸街歩きレビュー
2022.12.22 東悟子

2022年最後のサロンもオンラインでの開催となりました。文化発信地の光環境をテーマに11月に開催した下北沢と神戸の街歩きのレビュー。20名を超える参加者で2022年を締めくくるとなりました。

今年最後のサロンも、オンラインでの開催となっていました。来年こそは事務所にお招きして、開催できることを期待しております。サロン内容は昨年11月に開催した下北沢と神戸での街歩きのレビューでした。

下北沢は小田急線の地下化と京王線の高架化に伴い出現した土地の再開発がほぼ終わり、数年前とは様変わりした駅を中心に、2チームづつ東北沢⇒下北沢、世田谷代田⇒下北沢と1駅区間の街歩きをしたそのレビュー。

世田谷代田から下北沢まで歩いたチームは、小田急線路跡にできた遊歩道沿いに建つ旅館や商業施設の照明環境に概ね高評価を付けていました。照度がそんなに高くなく、暖かな色温度で統一されたポラードや施設の照明を英雄としていた一方、サイン照明がまぶしいという指摘もでした。

どこの街でも議論にあがる街路灯ですが、今回も英雄と犯罪者が共存していました。レトロで手づくり感があるスタンドガラスの街路灯は英雄との声が多かったですが、やはり明るすぎたりまぶしかったりする街灯が住宅をまぶしく照らしているものは、目についたようです。

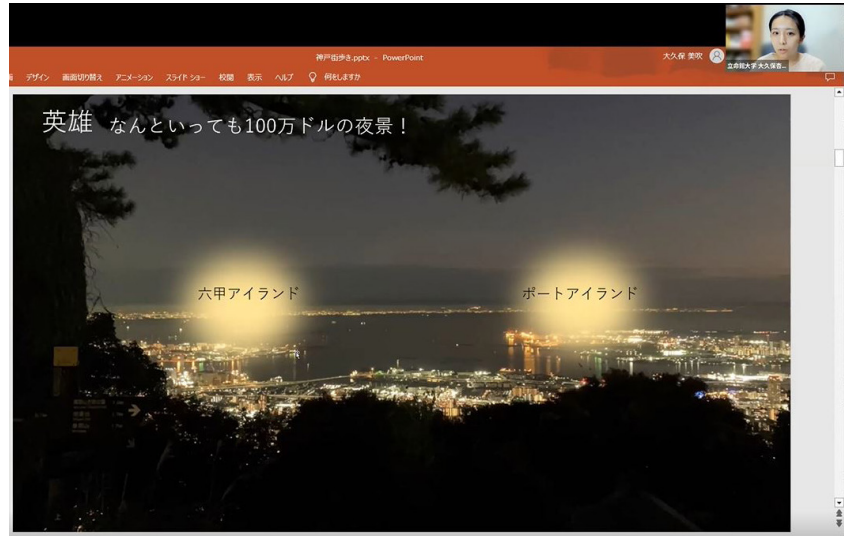
住宅街から街歩きをスタートさせた2つの班はどちらも樹木のアップライトを話題に上げ、光が強すぎて木の影が建物に大きく映り、ちょっと不気味に見えてしまっていることを指摘。折角の演出が逆効果になってしまっていることを犯罪者としてあげていました。

4班とも高評価だったのが、井の頭線の高架下にできた商業施設のミカン下北。不要となった電車架線を吊り下げワイヤーに利用し、賑わいを演出しながら遊び心のある照明になっていたりと、施設入り口の階段上部の天井全面に並んだ電球形状の照明がイベント的な高揚感に繋がりが、人を招き入れる照明になっていたという意見もありました。

下北沢は昔ながらの飲み屋や劇場街の昭和感あふれる街路灯やネオン風看板のある昔ながらの風景があったり、新たに出現した落ち着いた雰囲気を演出している遊歩道や旅館の心地よいエリアがあったり、若者が集う古着屋外や飲食店が立ち並び賑やかな光環境もあったりと、常に変化している『生きている街』という感じがしました。

神戸の報告では、昭和を感じさせる街並みとナトリウムランプのオレンジ色がマッチしていてノスタルジーを感じさせると高評価。一方企業のイメージカラーを前面に出したサイン照明や南京中華街の門が青く照らされているのが犯罪者と指摘され、周りの環境にそぐわないカラー照明はやはり犯罪者と糾弾されていました。

2023年のサロンは全員がーか所に集まることが出来なくても関西と関東と2か所位で集まり、賑やかに開催できることを期待しています。お楽しみに！ (東悟子)



探偵団サロン初参加の立命館大学の久保さんから神戸街歩きの報告



毎回サロンでは、班毎に参加者の意見をスライドにまとめて、発表してくれています

【照明探偵団の活動は以下の 21 社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
ウシオライティング株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
株式会社ルーメンジャパン
株式会社遠藤照明
パナソニック株式会社
ERCO / ライトアンドリヒト株式会社
大光電機株式会社
株式会社 Modulex
スタンレー電気株式会社
コイズミ照明株式会社
株式会社 YAMAGIWA
東芝ライテック株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
トキ・コーポレーション株式会社
湘南工作販売株式会社
山田照明株式会社
ルイスポールセン ジャパン株式会社
DN ライティング株式会社
三菱電機照明株式会社



探偵団通信に関してのご意見・ご感想等随時受付中です！

お気軽に事務局までご連絡ください。